

ブラック・フェミニズム小説の息吹

——娘として、母として

西垣内磨留美

はじめに

ヘンリー・ゲイツの編んだアンソロジー『黒人を読み、フェミニストを読む』（一九九〇年）の巻頭を飾ったのはゾラ・ニール・ハーストンの「芸術など」（一九三八年）である。それは意味ある配置であり、このエッセイが現代黒人女性の文学運動にとって大変重要なものであることが編者によって述べられている（九）。新たなハーストン伝の著者であるヴァレリー・ボイドは、ハーストンの「金メッキの七十五セント」（一九三三年）にはプロトフェミニストのバースペクティヴがあると評した（二四六）。また、二十世紀の黒人女性の声の生みの親という指摘もある（グラント 九二）。ハーストンは、活発に活動したフェミニズム活動家でも、また、単独のプロトフェミニストというでもないが、二十世紀初頭にあつて、彼女の作品の中にブラック・フェミニズムの視点や意識が含まれていたことは揺るぎがない。岩本裕子著『アメリカ黒人女性の歴史』（一九九七年）第五章の副題に「この世の驕馬」が使われていることを見ても、ハーストンの評価は文学の分野に限られたものではないことがわかる（一一）。ハーストンが『彼らの目は神を見ていた』（一九三七年）で黒人女性を表す表現として「この世の驕馬」を用いた行為そのものが彼女の精神を表象する^①。圧倒的、かつ、きわめて明示的なこの表現を効果的に使うことによって、彼

女の精神は理解され、彼女の中にはブラック・フェミニズムに対する認識があるという事実がより広範囲に浸透したと言つてよい。本稿では、『彼らの目は神を見ていた』と『ヨナのとうごまの木』（一九三四年）を中心にハーストンの作品のブラック・フェミニズムに関する側面を検証することとする。

一 黒人女性に声を

ハーストンが『彼らの目は神を見ていた』でジェイニーの結婚体験を示すとき、それは黒人女性が抱えている問題を具現する行為であつた。その裕福さが孫の人生の安寧につながると考え、祖母が勧めた最初の結婚相手キリックスはジェイニーを労働力としてとらえる。白人を頂点とした搾取関係の最下位に位置する黒人女性、つまり「この世の驕馬」の姿である。二番目の夫ジョーは、ジェイニーに女性のステレオタイプを押し付ける夫であつた。彼が妻に求めたのは、従順さ、寡黙さ、家にいることであり、即ち白人社会の男性中心主義の価値観に基づく理想像である。ジェイニーが嫁した相手は二人とも、その裏側に分ちがたく人種問題を貼付けたセクシストであつた。三番目の夫として登場するティーケイクは、発言、行動に問題が残りはするが、一緒に肉體労働をする、ジェイニーも加えてほら話に興じるなど、二人の関係は人間としての対等な関係の実現に近づいている。ティーケイクはまた、ジェイニーの声の解放の明確な支援者としての機能も持つのである^②。しかし、ティーケイクを含めジェイニーの三人の夫に共通するのは、「庇護している」という隠れ蓑を着て女性への支配欲を持ち、暴力を奮って妻の所有権を誇示しようとする側面である。ジョーの死後ひと月もたたないうちに、ジェイニーが「女つてのはか弱いもんだ。」と幾度となく聞かされ、何人もの男に言い寄られる場面において、それは三人の夫に限ったことではなく、男性の側では男性支配の夫婦関係が当たり前ととらえられていた時代であることが示される（八六）。ティーケイクの描

き方は時に問題視されるが、作品の背景が黒人女性はおろか白人女性さえ厳しい性差別を受けていた時代であったことを考慮すれば、アメリカ南部の一労働者で満足な教育を受けているはずもないティーケイクがフェミニストであるほうが異様である。夫の暴力による支配が現実であった時代の証言者としての意義を作品に与えるのなら、現代のフェミニズムにかなう理想的な夫ティーケイクは存在し得ない。誰がボスであるかをジェイニーに、そして周囲に示そうと、ティーケイクがジェイニーをたたいたその場面こそが彼らの結婚の破綻を暗示し、ジェイニーが自分を守るためにティーケイクを殺さねばならなかった瞬間は避けられなかったとして、ハーストンは男性のセクシズムと女性の側での同調に対する抵抗を表出したとするボイド（三〇三―三〇四）やアリス・ウォーカー（『母の庭を歩いて』三〇五―三〇六）の考察は的を射ている。彼との関わりの中ではジェイニーは真の自律性を獲得することはできない。ティーケイクの側の成長が描かれることがないならば、ジェイニーが人間として復権し女性として自立するためにはティーケイクの死が必要であったと言わざるを得ない。ジェイニーは黒人女性の問題を明示するがごとき三人の夫との結婚によって黒人女性の歴史を追体験したと言つてよい。

そのジェイニーが黒人女性として沈黙を破って自らの物語を語るのならその意義は大きい。そして、その聞き手が黒人女性であることにも意味がある。黒人女性が言葉を発し黒人女性に伝えるという構図は、後の作家たちに意識的に引き継がれているように思える。即ち、ジェイニーが過去の体験を友人フィビーに語って聞かせるという『彼らの目は神を見ていた』の構成は、プロトフェミニスト・ハーストンの意図を裏打ちするものである。

ハーストンの最初の小説『ヨナのとうごまの木』もまた、南部の貧しい黙らされた黒人女性（特に母親たち）に声を与えたとして評価されている（マイルズ 三六―三七）。物語の進行に従いハーストンはそれぞれの結婚のあり方によって世代の格差とその進展を提示している。ダイアナ・マイルズはその違いが黒人女性のフェミニズムの進化を説明しているとする（四一）。ともに暮らす相手として白人ではなく黒人を選ぶ自由をしたエイミー、裕

福さが結婚相手選択の基準であるエメライン、そして愛のための結婚を選択したルーシー。女性の前進は着実であるように見える。しかし、ルーシーに至っても幸福な結婚は獲得できない。ルーシーは、死の床で「悲しみの台所にいてすべての鍋をなめた」とその人生と語らねばならなかった（一二一）。ジョンはルーシーを愛しはするが、自由で対等な関係ではなく、常に庇護する意識を持っている。結婚後のジョンの成功は事実上ルーシーのガイドによるものだったが、最後まで彼のこの意識は変わらない。自分のセクシュアリティをコントロールしきれず、没落し、遂には命までも落とす原因を作る夫に嫁し、父系社会で耐える犠牲者の姿がルーシーを介して描かれている。

マイルズは、ハーストンが母や祖母の物語によって現実を語ることで、黒人社会の「幸福な家庭」という幻想や威圧的な男女関係を提示したとする（四四）。現実を語るためには、内情をよく知り、かつ広範囲に伝える能力がある人間が語る必要があり、ハーストンにはうつつの使命であった。母や祖母の経験を知っていたハーストンは、心の奥底から分かち合える苦しさや悲しみを読者に響く言葉で表出したのである。

しかし、その行為は同時に、当時の女性活動家が押し進めていた女性の向上の困難さ、また、人種問題の無力な被差別者の代償行為として、女性支配によって男性性を獲得する男性の実像を露呈することでもあった。このことは、当時の人種差別や性差別に抵抗する社会運動の連帯を乱すものとして働くこととなり、黒人社会からも女性運動家からも適正な評価を受けることのない長い無視につながったのである。しかし、後年、ウォーカーらはハーストンが作品に込めたメッセージを見逃さず、作家としての行動に共鳴しまた勇気を与えられたのは周知のことである。

二 驛馬でも女王でもない

前項で見たように、ハーストンは黒人女性に声を与えた作家であるが、ありのままに現実を伝えるだけの黒人女性の歴史の証言者にとどまっただけではない。マイルズは家族の犠牲としての黒人女性が描かれている『ヨナのとうこまの木』は女性性、母性の再定義の前奏としているが、ジョンの物語ではあっても、妻ルーシーや母エイミーに目を向けると、その試みは既に始まっているように見える（四六）。ルーシーはジョンの行いに苦しめられ、男性中心主義社会の犠牲者といえるが、単なる犠牲者で片付けられる女性かというところではない。ジョンは成功を収める屈強な黒人男性であるが、彼の人生はルーシーの助言によって成功に導かれていることが語られる。また、ルーシーの死後、家庭は崩壊し、家族を束ねていたのは家長のジョンではなく、妻のルーシーであったことがわかる。ルーシーは死の床で娘イシスに生き方を伝えようとする。後述するように、娘への受け渡しは不完全なものとなるが、教育と自立の必要性を、そして自分を愛するようにと幼いイシスに説く彼女の言葉は、ルーシーの黒人女性としての意識を読者に伝えるには充分である。（二三〇）

ジョンの母エイミーは、やさしい白人の元所有者より乱暴な黒人と生活をともにすることをを選び、自らの人生を選択していかうとする女性である。どこまでいっても主従の関係より、少なくとも対等な関係の実現の可能性のある結婚の選択であり、物知りの白人、無知な黒人、裕福な白人、貧乏な黒人といった逆方向の人種差別に囚われた夫ネッドの考え方とは対照的な選択である。

雨の中ジョンに水を汲みに行かせようとするネッドにエイミーが反対する場面にもその差は現れる。

「旦那がなんか言ったら、動かなきゃなんねえ、さつさとな。背中にムチ喰らったもんだ。若いもんが俺よりましってことはねえ。おんなじだ」

「違うよ、ネッド。あんたのようにもわたしのようにも子らにはなってほしくない」（四）

ネッドの無力感、被抑圧感が姿を変えた、白人から黒人男性へ、そして黒人女性や子供へと連なる虐待の連鎖への抵抗である。

『彼らの目は神を見ていた』のヒロイン・ジェイニーに接するときも、読者は彼女が南部の黙らされた女性では終わっていないことを知る。狂犬病に冒され、ジェイニーに襲いかかったティーケイクをやむを得ず殺してしまったジェイニーの裁判の場で、弁護人がジェイニーを形容した言葉は「打ちひしがれた哀れな者」（二七九）であるが、描写されるジェイニーはそのままではない。冷静に法廷の人々の様子を眺め、死ではなく誤解と闘うために、真実と彼女の真情を伝えようとする姿勢を持ち、実際にそれができるのである。無罪になったジェイニーにティーケイクの友人たちは暴言を浴びせるが、それは彼らがティーケイクを愛し、事件を理解していない故だと考え、理解させるように対応することができる。法廷の人々や友人たちの無理解を意識した上で、誤解を解こうと動くことができるジェイニー、また、悲しみの中にあっても、自ら納得がいくようにティーケイクのための葬儀を営むことができるジェイニーは、ジョーが彼女を型にはめようとした寡黙で無能な女性でもなければ、ティーケイクが暴力によって支配しようとしたか弱い女性でもない。三人の夫との結婚体験によって黒人女性の運命をたどった後、カストロフィを経て別の位相に移った女性である。

ジェイニーのカストロフィとして機能するのは、ハリケーン、そして、ティーケイクの死である。自然の驚異として彼らが目にした神は、洪水によってそれまでの秩序を壊し無秩序を与える神であった。それは浄化作用であ

ったかもしれないが、死んで行くティーケイクを前に徴を求めて空を見上げたジェイニーを、少なくともその時点では救ってくれる存在ではなかった（二六九）。洪水が遠因でティーケイクを失ったジェイニーは孤立無援で立つことを強いられるが、今やジェイニーは自分を保ち、自分を守ることでできる女性なのである。

ジェイニーの変化は冒頭の帰宅の場面で既に示されていた。出て行ったときのドレスとは違う姿で戻って来たジェイニーの色あせたシャツと泥だらけのオーバーオールの下には、「ポケットにグレープフルーツを入れているかのような引き締まった尻」と「シャツを破って跳び出さんばかりの胸」があり、豊かな黒髪は腰の辺りで羽飾りのように揺れていた（二七〇）。既成の価値観が否定され、彼女の内面の充実を物語るものである。危機を乗り越え、安定を手に行っているジェイニーはフィービーに語る。

「で、帰って来たってわけ。ここに帰れてうれしいわ。地平線のところまで行って、戻って来て、今度は家でこうして落ち着いて生きていける。この家はティーケイク来る前みたいに空っぽじゃない。いろんな思いがあふれてるんだ。特に寝室はね」（二八一）

女性の自立にとって、脆弱な経済力は見逃ごすことのできない障害であるが、ジェイニーはジョーとの抑鬱的な生活を代償として、夫の遺産を手にした。それはそれで女性の問題の検討の一つである。しかし、ジェイニーはジョーによって提供された地位や財産を求めるだけの上昇志向ではなく、内なる魂の解放を求める女性であった。祖母の忠告、またキリックスやジョーの価値観に最終的には首肯しない頑固さがジェイニーの中にはあり、それが彼女の行動の原動力になっているように思える。自分を納得させるために自分で動く黒人女性のヒロインである。

ハーストンはヒロインの創造にあたって、ステレオタイプ化された黒人女性のイメージの払拭から始めなければ

ならなかったが、エイミー、ルーシー、ジェイニーがその役割を担ったと言える。

三 継承の問題

ハーストンは前進しようとする意志をもつ女性としてヒロインを描いているが、その道は平坦ではないこともまた知っていた。『ヨナのとうごまの木』においても『彼らの目は神を見ていた』においても、女性の解放を希求する魂の継承は必ずしもうまく行われていない。直接の、そして最も力強い継承となるはずの母から娘へ受け渡す、世代を越える前進が描かれないのである。

娘が精神の構築の上でその存在を最も必要とし、語り合うことでその精神を理解し受け継ぐことのできる時期にハーストンの母親は既に他界していた。ハーストン自身が母親不在の状況の体験者である。この状況は『ヨナのとうごまの木』においてルーシーとイシスの不幸な形での早すぎる別離に反映された。ルーシーは死の床でイシスの今後の指針となる話をするが、イシスがまだ理解できないことが意識されている（二三〇）。生きていく上で支柱となる魂の交流とするには、時間が短すぎ、イシスは幼すぎた。土地の人々が行う死の際の慣習を望まないことをルーシーはイシスに伝えるが、子供であるために相手にされずイシスはそれを阻止することができない。別離はさらに痛ましいものとなり、このことは長くイシスを苛むことになる。

『彼らの目は神を見ていた』のジェイニーの母親もまた不在である。母親は家を出て、ジェイニーは祖母に育てられる。祖母から母親、そしてジェイニーに至る三代の系譜において、子の誕生は常に意に添わぬ妊娠によるものであることも注目に値する。祖母は奴隷時代にジェイニーの母リーフィを白人所有者によって孕まされ、リーフィはレイプされてジェイニーを産むことになる。祖母は生まれたばかりのリーフィを連れて逃げることで母娘の別離を

免れ、なんとか娘を育て上げる。この設定は母娘の絆は強くなるという結果をもたらすようなものであるが、リーファイはジェイニーを産んですぐに家出してしまふ。自ら、娘としての、また、母親としての絆を断ち切ってしまうのである。そこまでの経緯では父親もまた不在である。ジェイニーは父親となるべき三人の夫を持つが子を産むことはない。梨の木と蜜蜂のイメージでジェイニーの性の目覚めとともにその結婚観が読者に提示されるが、その蜜蜂、即ち再生産を含意する自然な真実の愛の象徴として登場するティーケイクとの間にさえ、子供は誕生しないのである。『彼らの目は神を見ていた』において、再生産を伴う男女対等な結婚は完結せず、幸福な母娘関係も描かれることはない。この作品では母子直接の連携は生まれようもなく、精神面も含めた直系の再生産という点では著しく不毛な小説ということになる。

『ヨナのとうごまの木』には、ルーシーとイシスとは別の母娘関係が存在する。ルーシーとその母エメラインである。エメラインはルーシーとジョンとの結婚に反対し、裕福なミムスのもとへ娘を嫁がせようとする。そこには娘かわいさ故の自分の経験に基づいた規範、価値観の押しつけがあるのであるが、母親としては当然の考えでもある。娘の方は、近いが故の反発もあり、愛ある結婚を望む。最も普通に見える母娘関係ではある。時代背景を考慮すれば、母娘の間に受けた教育の差もあり、エメラインは、未知の領域へ踏み込むことへの恐怖心が背景にある、娘を精神面で導き得ない母親ということになるかもしれない。そこに見えるのはやはり断絶であり、そこに前進があるとすれば、継承ではなく母親の限界の克服という形で進行するのである。

直接の母娘関係において継承が困難であるならば、魂の継承を行うための動きとしては家庭の外へ出て行く必然がそこに生じる。

四 継承の行方

先の引用箇所において、『ヨナのとうごまの木』のエイミーには世代の進行とともに事態が改善されるというヴィジョンが見られるが、次の彼女の発言にも大局的に継承をとらえるパースペクティブが存在する。

「子供を産んでも自分のもんにはならなかった。でも今は自由だ。……私らの子は私らのものだ。たぶん何代もかかるだろうさ。けど、子供ら大事にする練習しとかにゃ」(五)

次の言葉もまたエイミーによるものである。

「黒んぼだって気絶するさ。あんたの時代にも私の時代にも無理かわからん。けど、いつか白人みたいに私も気絶するようになるさ」(二〇)

彼女の言葉にあるのは人間性の回復への展望であり、単一の家庭を出て世代を越えて受け渡し前進しようとする意志である。

結婚相手の選択に人種、財力がそれぞれの決め手となるエイミーやエメラインに比して、愛ゆえの結婚を選択することのできたルーシーは、この点で一歩前進したように見える。しかし、彼女もその結婚生活において幸福な女性とは言えなかった。ルーシーが死の床でイシスに説くのは、教育と自律の重要性なのである。人間性回復への旅

はジェイニーの遍歴に渡されていくことになる。

では、『彼らの目は神を見ていた』では継承のヴィジョンはどのように示されているのだろうか。この作品の場合、ヒロイン・ジェイニーが友人フィービーに自分の体験を聞かせるという構造自体が伝授のための舞台として機能している。女性どうしのツーショットは、時に師弟の構図を形成する。様々な経験を経て師の資格を得たジェイニーの成長、そして町の女性たちに対する位置関係は、実は作品の冒頭にすでに示されている。「もし神様があの人たちのことをもう考えないっていうんなら、私が考えてやるわ。あの人たちは、草ぼうぼうの原っぱでなくなっちゃったボールなんだもの。」というジェイニーの言葉である(五)。フィービーへの伝授の成功はフィービーの次の言葉によって示唆される。「あなたの話聞いて、十フィートは伸びたような気がするよ」(一八二)。ここで越えられるのは世代ではなく血縁である。母娘の間の直接の継承が困難なのであれば、代替の形をとる継承が存在しなければならぬ。母娘関係の変形は必然なのである。モリー・ハイトはさらに進んで、ジェイニーの母性について、次のようなことを指摘する。

事実上ジェイニーは母親の機能を負う。無論、聞き手であるフィービーの存在を伴って。彼女は自身の物語の作者、即ち、母親の知恵の源と主題の両方になり、彼女自身を産むのである。(四四八)

このことはフィービーが再会直後にジェイニーにかけける言葉「元氣そうだね。自分の娘みたいじゃないか。」によって早くも裏付けされているように見える(四)。男性に庇護される女性の姿からはほど遠い自律した究極の再生産と言うべきものである。ティーケイクの子を宿すという結末ではなく、彼の残した種をまくというイメージも形を変えた再生産のあり方を示唆している。母親不在の状況であつたからこそ精神上の母親を希求し、もつと大き

なヴィジョンの中で母を求めざるを得なかったのではないのか。それは世代、そして血縁を超えた連帯にもつながる、負から正に転じ得る遺産と言えなくもない。家庭内では終結し得ない状況が黒人女性全体の連帯意識を高め、様々な活動につながったとも考えられる。母や祖母の現実から作品が生まれ、その虚構はまた現実の行動を喚起する力となったのである。黒人女性作家の作品はそれ自身がメッセージとなる。ハーストンは継承の道は一本でないこと示す、より大きなヴィジョンを提示したのではなからうか。

マイルズはジェイニーの設定を「ハーストン自身の経験を外在化させ、母、祖母の経験へ応答した場所」としている(五五)。ハーストンはフェミニズムの意識をもって黒人女性の記録を残し、目指すべき方向を示唆し、力を与えた作家の先駆けと考えることができる。

むすび

『ヨナのとうごまの木』や『彼らの目は神を見ていた』のように一見私的に見える作品であっても、それは同時に公的な意味をも持つ。否応なく共通に負ってしまった黒人女性の負荷を検討し、報告し、次へつないでいく作品だからである。ハーストンがフェミニストと言える強い意識を持っていたことは、黒人内部での差別が問題視されていなかった時点で、作品において抑圧される女性の苦闘を扱ったことで明らかである。認識の記録としての小説は女性たちへの呼びかけ、そして問題提起の役割を果たした。黒人女性の抱える問題の認識、そして変革への意識は拡大し、後世の人々の闘いの力を集約することとなった。

ハーストンが小説という形で私たちの前に差し出したブラック・フェミニズムは、ウォーカー、トニ・モリスンを始め、後の作家によって綿密に検討されることになる。ジェイニーとフィービー、シャグとシリ、ネルとスーラ

の存在に系譜が認められることはボイドの指摘するとおりであろう(四三八)。後者二組のセクシュアリティのからむ関係の濃密さからは距離を感じさせるものであるが、黒人女性の苦闘と解放を伝える語りの場となったジェイニーとフィビーの構図は後の黒人女性作家にインスピレーションを与え、新たな命脈を産んだはずである。

しかし、そこでは、ブラック・フェミニズムの一枚岩でないもろさ、複雑さ、困難さも露呈してくる。同世代では可能であった深い共感、連帯意識が、直系の母娘ではつながることがむずかしい。ハーストン再発見から再版に至るまでの当時の興奮を多くの黒人女性作家や批評家たちが伝えているが、彼女たちがすり切れたコピーをむさばるように読み、そこに息づいているブラック・フェミニズムを肌で感じたときに、ハーストンの母親性は黒人女性の間に最も顕著に存在していたのかもしれない。ハーストンの作品は、強いメッセージを内包するが故に、読者の反応があつてなお一層輝いた最も明確な例であろう。精神上の母への希求を抱く読者、重い歴史を背負った女性たちの魂の交流がそこにあつたのである。

《注》

- (1) この世の驛馬はジェイニーの祖母の言葉として現れる。「白人が荷物を投げて、黒人の男に拾えと言う。男は拾い上げないわけに行かない、けど運ぶわけじゃない。女に渡すんだ。私の考えじゃ、黒人女はこの世の驛馬なんだよ。」(二四)
- (2) 瀕死の驛馬を苦役から救ったジョーへの言葉(五五)でも示されるようにジェイニーは元々話が苦手というのではないが、ジョーの圧力によって黙って耐えることを強いられる。
- (3) ジェイニーの結婚体験と黒人女性の歴史の関係については、拙論「驛馬でも女王でもない」で検討したので参照されたい。
- (4) 例えば、『カラー・バードル』(一九八二年)のシャグとシリの場合である。モリー・ハイトの指摘するようにウォーカーがハーストンをシャグとして登場させ、ヒエラルキーの破壊者としてのハーストンの文学上の役割を示したと見れば、この構図はさらに興味深いものとなる(四四九)。

《引用・参考文献》

- Boyd, Valerie. *Wrapped in Rainbows: the Life of Zora Neale Hurston*. New York: Scribner, 2003.
- Gates, Jr. Henry Louis ed. *Reading Black, Reading Feminist: A Critical Anthology*. New York: Meridian, 1990.
- Grant, Nathan. *Masculinist Impulses: Toomer, Hurston, Black Writing, and Modernity*. Columbia and London: U. of Missouri Press, 2004.
- Hite, Molly. "Romance, Marginality, and Matrilineage: *The Color Purple* and *Their Eyes Are Watching God*," *Reading Black, Reading Feminist: A Critical Anthology*.
- Hurston, Zora Neale. "The Gilded Six-bits," *The Complete Stories*. New York: Harper Perennial, 1996. 86-98.
- . *Their Eyes Were Watching God*. 1937. New York: Harper & Row, 1990.
- . *Jonah's Gourd Vine*. 1934. New York: Harper & Row, 1990.
- 岩本裕子『アメリカ黒人女性の歴史』明石書店 一九九七年。
- Miles, Diana. *Women, Violence, and Testimony in the Works of Zora Neale Hurston*. New York: Peter Lang, 2003.
- 西垣内磨留美「驛馬でも女王でもなし」『長野県看護大学紀要』第一巻 一九九九年。九—一六頁。
- Walker, Alice. *In Search of Our Mothers' Gardens: Womanist Prose*. Orlando: Harcourt Brace, 1983.
- . *The Color Purple*. 1982. New York: Pocket Books, 1985.

* 本論の内容は以下の題目により下記の学会で発表した。

"Black Feminism in Zora Neale Hurston's Novels," Hawaii International Conference on Social Sciences 2007, 2007.5.31, Honolulu.